

笹川陽平・日本財団会長とフランシスコ教皇との会談

日本財団はバチカンで1月23、24日の両日国際ハンセン病会議を開催しました。1月26日、笹川陽平・日本財団会長は、バチカン宮殿に於いてフランシスコ教皇（His Holiness, Pope Francis、第266代教皇）と会談しました。以下会談の内容です。

笹川：お会いできて光栄です。私は世界のハンセン病を無くすための活動に尽力してきました。特にハンセン病は差別を伴う病気であり、その差別撤廃にも努力しています。今回はバチカンのお力をお借りして、ハンセン病の差別を無くす会議を開催し、会議が成功裏に終わったことを報告します（教皇は頷きながら話を聞く）。南米特にブラジルを中心にカトリックの国にはハンセン病の患者が沢山います。今回バチカンでハンセン病に関するシンポジウムを開催できたのは大きな成果です。引続き南米でも積極的に活動しますので、いずれまた報告をする機会を賜りたいと思います。

教皇：（左手の親指を上げながら）いつでもお待ちしております（the door is open）。

笹川：ハンセン病は完治しても社会から差別を受ける病気です。国によっては差別法が残っており、ハンセン病が完治してもレストランすら行けないこともあります。こうした差別により、回復者の多くは乞食で生計を立てているのが現状です（教皇は頷きながら話を聞く）。教皇台下の力をお借りし、世界からハンセン病を無くすこと、そして患者や回復者の生活向上並びに人権問題としての解決をみるよう、活動をして参りたいと思います。

教皇：アルゼンチン（※教皇はアルゼンチン出身）においてもハンセン病との闘いは続いています。アルゼンチンにもハンセン病は依然存在し、我々カトリック教会も情熱と魂（myth）を込めて活動をしています。

笹川：アルゼンチンにおいてもハンセン病患者をゼロにするよう活動することをお約束します（教皇は笑みをたたえながら話を聞く）。アルゼンチンが先日のサッカーW杯で優勝したことに祝意を表します。教皇台下はW杯をご覧になりましたでしょうか。

教皇：多くの人とコミュニケーションを取ることに多忙で、見ることが出来ませんでした。しかし今日貴殿からはじめて結果を伺うことが出来嬉しく思います。貴殿のハンセン病を無くす活動に感謝致します。病気が治るということは大切であり励みにとなります。

笹川：1980年代にハンセン病の特効薬 MDT のお蔭で、今日まで約1600万人の患者を病気から解放できました。しかしまだまだ隠れた患者がいることも事実であります。

教皇：積極的に探して見つけなければなりません。

笹川：おっしゃる通りです。本日教皇台下にお目にかかることが出来、私たちは大きな勇気と力を頂きました。

教皇：ありがとうございます（教皇は両手の親指を上げる）。

笹川：教皇台下が訪日された際、日本国民は教皇台下を熱烈に歓迎致しました。何か日本での思い出はありますか。

教皇：日本には2回行ったことがあります。前回は長崎と広島を訪問しました。長崎では大変心を打たれました。何か特別なつながり（special connection）を感じました。長崎で1枚の戦争の写真を見ました。今その写真をお見せします（教皇はベルを押して写真を持ってくるよう連絡）。戦禍の犠牲となった少年の写真であり、大変心を打つものがありました。兄が、亡くなった弟を背負った写真です。この写真はアメリカ人の写真家が撮影したものです。残念ながら撮影者本人は体調が優れずお会い出来ませんでした。撮影者の息子と日本で会うことが出来ました。

笹川：教皇台下より、長崎そして広島の人に何かお伝えしたいことはおありでしょうか。

教皇：彼らは戦争で多くの苦しみを耐えてきた人々です。（写真を同席者に配りながら）日本の人々に敬意を表します。この写真は亡くなった弟を火葬場で焼くために順番を待っている少年の写真です。アメリカの写真家が撮影したものです。少年は唇をかんで辛さに耐えた表情をしています。

笹川：広島では世界の指導者が集まり、核兵器のない時代をつくりたいと準備を進めているところです。教皇台下は長崎と広島両市を訪問され、どのような感想をお持ちでしょうか。

教皇：戦争は悲劇です。戦争は二度としてはなりません。戦争は二度としてはなりません。（語気が強くなる）

笹川：私は6歳の時、戦争に直面しました。空襲があり、住んでいた町で生き残ったのは私と母の2人だけでした。世界の人々の為に働くことは生き残った者の責務だと考えています。

教皇：すばらしいことです。

笹川：最後に、教皇台下にお願いがあります。欧州の人はハンセン病は過去の病気として考える傾向にありますが、アフリカ、アジアそして南米などには依然として多くの患者がいます。（Don't Forget Leprosy のバナーを見せながら）このバナーを世界中で掲げたいと考えており、是非教皇台下と共にこのバナーと一緒に写真を撮らせていただきたいと思いますと思うのですがいかがでしょうか。

教皇：もちろんです。（教皇がベルを押して写真家を呼び、教皇と笹川がバナーと共に記念撮影）

笹川：この一枚の写真が世界中のハンセン病の人を救うことになるでしょう。お時間を頂戴し心より感謝申し上げます。

教皇：貴殿の活動に敬意を表します。

（この後、教皇よりメダルが手交され、握手の後本会談は終了しました）。

写真「焼き場に立つ少年」の裏側に記載されていた文言（原文はスペイン語のため、仮訳です）：

「戦争の産物」

火葬場で死んだ弟を背負って順番を待っている子供。

アメリカの写真家ジョセフ・ロジャー・オドネルが長崎の原爆投下後に撮影した写真である。

子供の悲しみは、噛まれた唇から血がにじみ出ることではしか表現できない。

